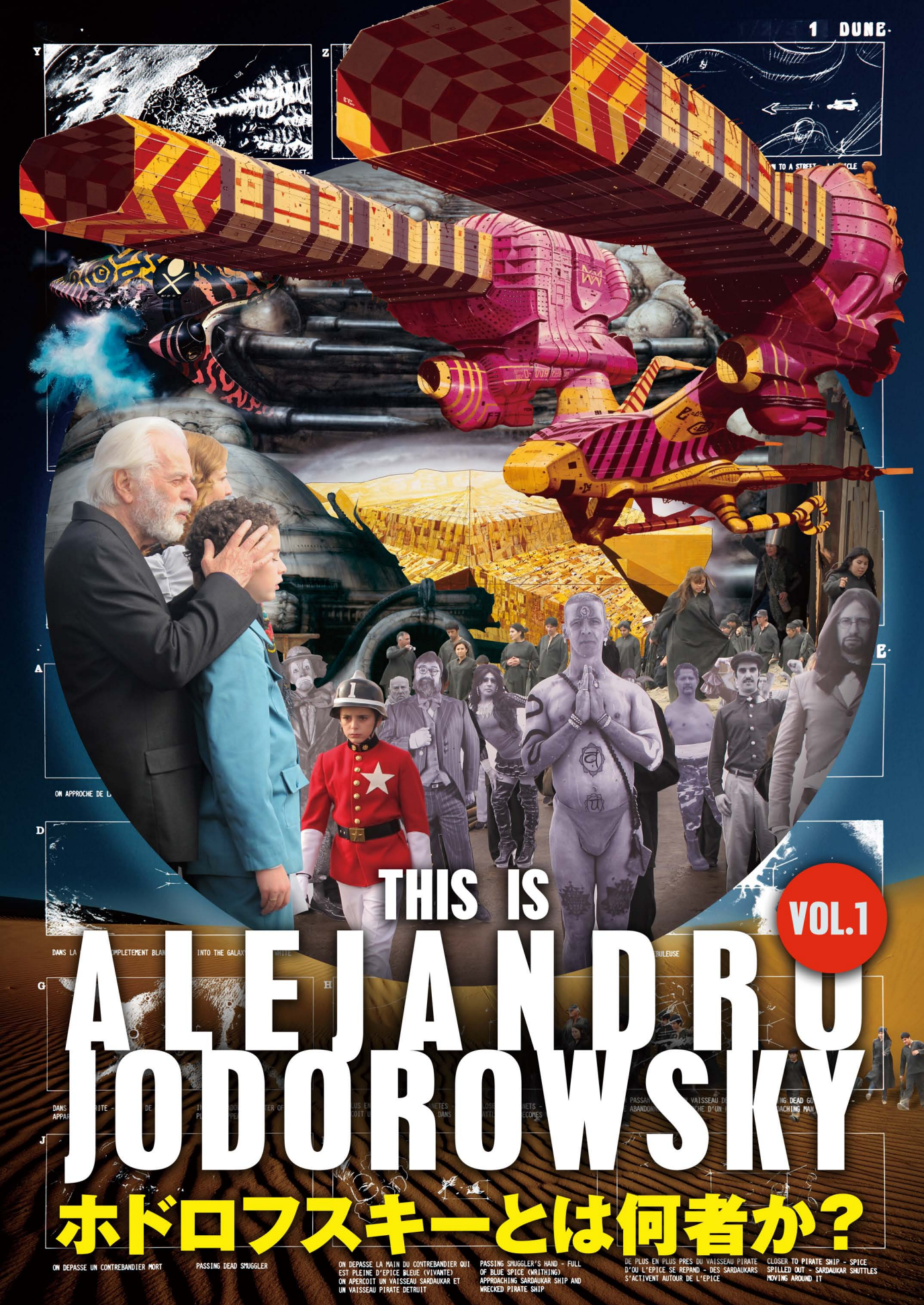

1 DUNE
THIS IS
VOL.1
ALEJANDRO
JODOROWSKY
ホドロフスキーとは何者か？
ON DEPASSE UN CONTREBANDIER MORT
PASSING DEAD SMUGGLER
ON DEPASSE LA MAIN DU CONTREBANDIER QUI EST PLEINE D'EPICE BLEUE (VIVANTE) ON APERCOIT UN VAISSEAU SARDAUKAR ET UN VAISSEAU PIRATE DETRUIT
PASSING SMUGGLER'S HAND - FULL OF BLUE SPICE (WRITHING) APPROACHING SARDAUKAR SHIP AND WRECKED PIRATE SHIP
DE PLUS EN PLUS PRES DU VAISSEAU PIRATE D'OU L'EPICE SE REPAND - DES SARDAUKARS S'ACTIVENT AUTOUR DE L'EPICE
CLOSER TO PIRATE SHIP - SPICE SPILLED OUT - SARDAUKAR SHUTTLES MOVING AROUND IT

ホドロフスキーとは何者か?

柳下毅一郎(映画評論家・特殊翻訳家)

なぜこんな不思議な映画を作ったのか

哲学映画というには俗すぎる、娯楽映画と呼ぶには謎だらけ。

アレハンドロ・ホドロフスキーとは何者か?

『エル・トポ』がはじめて日本で紹介されたとき、それは「ジョン・レノンも認めたフリーク総出演のカルトムービー」だった。メキシコの無名監督が作った哲学的な内容の映画がニューヨークでカルト的なヒットを続けている。ジョン・レノンも惚れこんで、配給権を買ったという。中身は見られぬまま、“ホドロフスキー”というエキゾチックな名前だけが世に広まっていった。

ついにその映画が日本で見られる日が来たとき、観客が目にしたのは形而上的西部劇とでも言うべき映画だった。黒づくめの殺し屋は名うてのガンマンを皆殺しにし、砂漠の最強者となるものの、すべてを失い聖者として再生する。哲学映画というには俗すぎるし、娯楽映画と呼ぶには謎だらけだ。一口では咀嚼できない謎に満ちた巨大作品。それが『エル・トポ』だった。だからこそ一部に熱狂的なファンを作りつつ、多くの困惑した反応を呼び起こしたのである。さらなる本格的魔術映画『ホーリー・マウンテン』が紹介されても、その評価は変わらなかった。ホドロフスキーとは何者であり、なぜこんな不思議な映画を作ったのか。

映画だけを見ていたならば、その答えは永遠にわからないかもしれない。そもそもホドロフスキーは映画マニアが高じて映画を作りはじめるタイプの映画監督ではない。むしろそれは映画の作り方など何も知らなかった野蛮人がはじめて手にしたカメラで撮ってみたような映画だと言える。映画こそが至高のメディアである、と語るホドロフスキーだが、映画は広汎な活動の一部でしかない。ホドロフスキーにはいくつもの顔がある。

演出家ホドロフスキー

シュルレアリストたるホドロフスキーはハプニングによって現実を攪乱する。

そもそも映画を撮りはじめる前、ホドロフスキーは舞台演出家として知られた名前だった。1960年にメキシコに渡ってのち、ホドロフスキーはシュルレアリスムの影響を受けた「前衛演劇」なる劇団を主宰し、ほぼ十年にわたってメキシコ演劇の最前衛として活躍してきた。ベケットやイヨネスコ、ジャリなどの戯曲のほか、ウィルヘルム・ライヒを原作にした自作の芝居も演出したという。

62年にはスペインの映画監督フェルナンド・アラバル、フランス人作家ローラン・トポールとともに、「パニック・ムーブメント」なるパフォーマンス・グループを結成する。ブルトンとの出会いから元祖シュルレアリストたちが老いて保守化していると考え、シュルレアリスム本来の攻撃性を取り戻そうとしたのだ。1965年のパリ自由表現祭では、ホドロフスキーは蛇を胸に貼りつけ、ガチョウの首を切って、裸になって鞭打たれるパフォーマンスを演じた。メキシコでテレビ出演したときには大ハンマーでグランドピアノをぶちこわすパフォーマンスによって抗議電話の嵐を巻き起こした。シュルレアリストたるホドロフスキーはハプニングによって現実を攪乱しようとする。

ホドロフスキーにとって、演劇とは決して舞台の上にとどまるものではなかった。街頭パフォーマンスと演劇のあいだに違いはなかったのだ。ホドロフスキーの映画もまた現実を攪乱する。だが、そのことはどこまで理解されていただろうか。

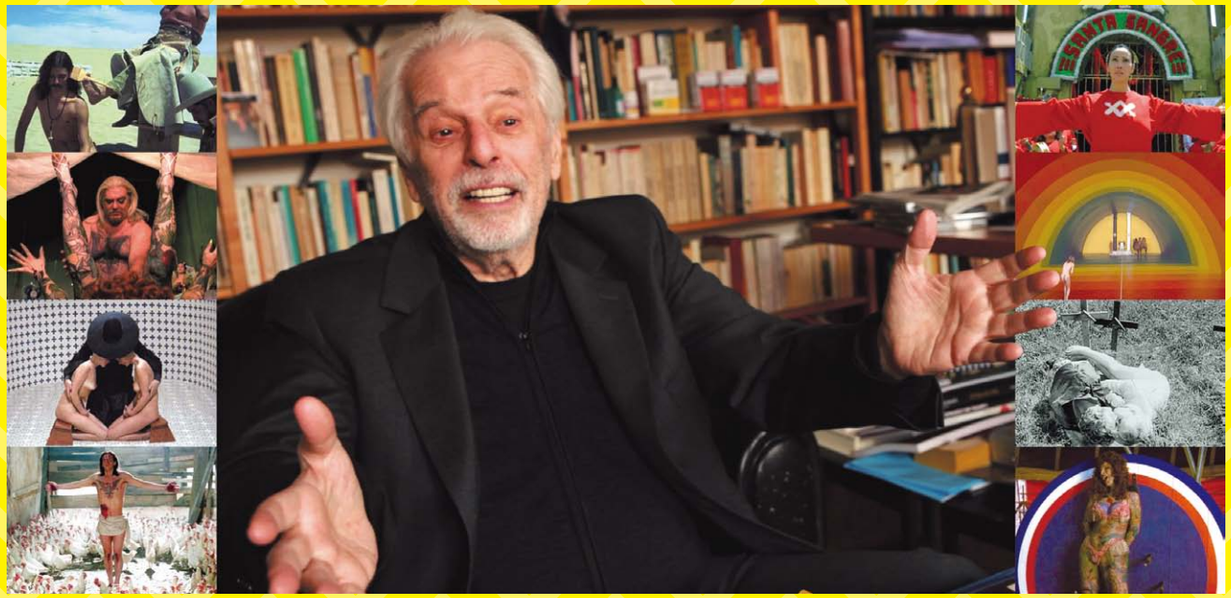
『エル・トポ』と『ホーリー・マウンテン』という二本の傑作により、カルト映画監督としての地位をゆるぎないものにしたホドロフスキーは、その次の作品としてフランク・ハーバートの『デューン/砂の惑星』の映画化にとりかかる。この奇跡の映画がいかなるものとなるはずだったか、そしてそれがいかに頓挫することになったかはフランク・パヴィッチ監督のドキュメンタリー『ホドロフスキーのDUNE』に詳しい。どう考えても無謀なオールスター超大作は誰もが予想したように空中分解することになった。それ見たことか、という人も多かったろう。だが、そうした反応は根本的に誤っていると言わねばならない。ホドロフスキーにとって、映画はただの映画ではない。それはつねに人生を変える経験でなければならないのだ(ちょうど『エル・トポ』がカルト映画として多くの人生の道筋を変えたように)。だから普通のSF映画、ホリデーシーズンの大作エンターテイメントなど、ホドロフスキーには最初から作るつもりはなかったし、実際作れはしなかったろう。『デューン』は「見た人の意識を変える映画にするつもりだった」とホドロフスキーは言う。それは決して比喩的な意味ではない。文字通りの見るドラッグをホドロフスキーは作るつもりだったのだ。それが可能だったかどうかは問題ではない。

漫画家ホドロフスキー

詩よりも鮮烈なイメージを。メビウスとの共作『アンカル』で本格的にコミック作家へ。

畢生の大作『デューン』が頓挫したのち、ホドロフスキーは『デューン』製作時のパートナーだったフランスのBD作家メビウスとともにコミックを描きはじめる。実際には、ホドロフスキーはメキシコ時代からコミックを手がけていたはいたが、本格的なコミック作家となるのはメビウスとの共作『アンカル』からである。『アンカル』、そして同一宇宙を舞台にしたシリーズ『メタ・バロンの一族』は、未完成に終わった『デューン』の脚色からアイデアを借りて描かれている。『デューン』では実現できなかったことを、コミックのかたちで世に送り出したのが『アンカル』なのだと言える。

コミックなら映画の莫大な予算がなくとも壮大な宇宙を描くことができる。とはいえ、それは単なる映画の代替物ではない。ホドロフスキーはもともと詩人として創作活動をスタートしたのだが、そのシュルレアリストとしての夢想がもっとも鮮烈に発揮されたのはコミックにおいてかもしれない。メビウスとの共作『天使の爪』はときに危険な領域にまで性的夢想をさまよわす。たぶん実写では決して実現できない(生々しすぎて、まったくの別物になってしまう)し、詩よりもはるかに鮮烈なイメージを伝えてくれる。メビウス以外の画家との共作でも、ホドロフスキーのイメージ喚起力はいささかも衰えない。ホドロフスキーのコミックは次々に現実を貫くイメージをくりだす。決して映画の代替物でもないし、読み捨ての娯楽にもなりえないのである。



魔術師ホドロフスキー

無から有を生みだし、見る者を眩惑し、奇跡を引き起こす。

ホドロフスキーとは何者なのか?

イメージによって現実に変化を引き起こす、それは魔術と呼ばれる行為である。ホドロフスキーは詩人、演出家、パフォーマー、映画監督、コミック作家として創作を発表するかたわら、タロットや禅、また瞑想などにとりくんできた。タロット・リーディングのかたわら、ホドロフスキーは心理療法を考案する。ホドロフスキーが呼ぶところのサイコマジックは、ロールプレイングと精神分析を合わせたような自己改革療法である。たとえば足の指のあいだにイボができた友人に対しては、母親をチリに残してきたことへの罪悪感が根底にあると考え、母親の写真を十枚コピーして、毎朝緑色の粘土で足の裏に写真を貼り付けるように命じる。あるいは、進路への迷いを感じている若者には、取れなかった学位証書の模造品を本物より大きなサイズで作り、額装した下にボクシングの優勝カップを置いてから仕事にとりかかれ、とアドバイスする。冗談のような儀式行為によって無意識を欺き、希望を実現するのがサイコマジックなのだ。ホドロフスキーの魔術はもちろん自分自身にも適用される。メキシコからパリへと旅立つにあたって、ホドロフスキーは「勝利」の名を持つ四頭立ての馬車を借りあげ、その後を走った。つまり「勝利」を追い求め、最後にはそれに追いついてつかみとった。ホドロフスキーは儀式によって現実を自分の願うようにねじ曲げてみせたのだ。ホドロフスキーは魔術師である。無から有を生みだし、見る者を眩惑し、奇跡を引き起こす。それがホドロフスキーの芸術なのだ。

ホドロフスキー・ショック!!!!!

JODOROWSKY SHOCK!!!!!

私はあの時、初めてホドロフスキー作品と出会った。

（敬称略・順不同）

まだ子供だった頃にうちの両親は我々子供たちに見せないように夜遅くなってからビデオで怪しげな映画を見ていた。普段は堂々とビデオで映画鑑賞する親たちがコソコソすれば子供は気になるもので次の日にリビングに置いてあったその映画のパッケージをマジマジ見たのを覚えている。これは**まだ俺には早い映画なんだとパッケージを見て、見てはいけない物を見たようで何か恥ずかしくなってコソコソしてしまった。**それから十年以上が過ぎてふとレコードショップに足を運び適当にCDをあさっていた時にとてつもなくカッコいいジャケットが目に飛び込んだ、El Topoと書かれた向こうに黒い馬に傘をさして乗る人、そしていわゆるジャケ買いをした。俺は映画を全然見ないのでそれが何なのかは家で調べるまでわからなかった。アレハンドロ・ホドロフスキーって人の映画のサントラなんだなとわかり早速CDを聞きドンピシャ欲しかった感じだったので嬉しかった。そしてその勢いでレンタルビデオ屋に行きエルトポを借りた。映画もドンピシャに好きな映画だったので、そこからまたレコード屋に行き色々調べてる時にサンタ・サングレを見つけ驚いた!なんと両親があの時見ていたビデオのパッケージと同じだったのだ!やはり俺はあの人たちの子供なんだなと感心してしまった。監督の名前をアレハンドロ・ホドロフスキーと一度では読めなかったのを覚えている。

浅野忠信（俳優）

15歳くらいのころ、レンタルビデオ屋に、なんだか得体のしれないパッケージのビデオテープがありました。黒い男が傘をさして馬に乗り、その後ろに裸の子供、砂漠、向こうに青い空。不穏なのか、とぼけているのか、わからない雰囲気。『エル・トポ』でした。当時、サブカルチャー的なものを漁っていたいた自分は、それを手に取ります。そして家にかえってテープをデッキにいれます。

しょっぱなから頭が混乱しました。サブカルチャーなんて、どうでもよくなり、果てはカルチャーとか、そんなの、全部吹っ飛んでいきました。わけがわかりませんでした。どうしたらいいのか、恐れすら感じました。だから感想を持てなかった。それから、数年後に、また観ました。わからなかったけど、これは、なんだか凄いぞと思いました。30歳のころ観ました。大笑いをしました。

戌井昭人（作家・鉄割アルバトロスケット）

ホドロフスキーは自分にとって、血であり骨であり皮であり肉であり内臓であり、そして、細胞である。ミトコンドリアが細胞壁を撃抜くとき、予言者は核膜を舐めまわす!ゴルジ体が、核の檻に閉じ込められる時、自らの細胞は異形の分裂を成し遂げた!それが現在の僕だ!!!!!!!!!!!

つまりホドロフスキーは、**僕にとって、紛れも無く祖先的創造の源であり、言い換えれば、種の起源…時として人はそれを神と呼ぶ!!!!!!!!!!!!!** 師に出会ったことによって自分は変異を遂げたのだ!!!!!!!!!!!　ああーーーーっ!!!!!!!!!!

ホドロフスキー初体験：第一次カルトフィルムブームの87年、にっかつ配給期の「エルトポ」!!!!!!!

宇川直宏（DOMMUNE）

ホドロフスキーが主演の息子と『サンタ・サングレ』のプロモーションで来日した時、あるTV情報番組に一緒に出演したことがあり、合間に『砂の惑星／デューン』の感想を聞くと、一瞬、間をおいて、リンチはとてもいい監督だ、しかし、プロデューサーがいけなかったね、と気配り上手な答えが返ってきた。ところが、実際の反応はそんな上品なものではなかった!!!・・・ということが、「ホドロフスキーの『DUNE』」でわかった。歯に衣着せぬ、どころか牙を剥き咆哮するかのごとくで、声を上げて笑ってしまった。正直この上ない。すばらしい!『エル・トポ』がトンデモナイ映画との噂は、学生時代に伝わってきていた。<メキシコ映画祭>で上映された記憶（邦題『もぐら』）があるが観ていない。直後に季刊『フィルム』がシナリオを掲載、それを読み、興奮、『もぐら』を見逃したことを後悔した。映画館での体験は、渋谷パンテオンのファンタスティック映画祭特別上映の時であったような。**脳髄破裂のシネマ・ハイ体験。**

滝本誠（評論家）

ホドロフスキーは伝説だ。東京に出てきた頃、単館映画館に自分の居場所を求めていた。

わけもわからずニューシネマを貪り、インディー映画を好んでいた頃、風の噂で「エル・トポ」の名を聞いた。〝伝説の映画!〟、〝「エル・トポ」を観ずに映画を語るな!〟、〝キング・オブ・カルト!〟、〝鬼才、ホドロフスキー!〟、人から聞くエル・トポ列伝には、どこか**未知の強豪と呼ばれるプロレスラーに似たロマンを感じた。**しかし、エル・トポに出会うには簡単ではない。1990年代当時ホドロフスキー映画を観る手段がほとんど無かった。VHSでセル化されていることを知ると、土地土地でレンタルビデオ屋を覗いては探す日々。まるでホドロフスキーに恋したかのような気分で、車を走らせた。そして遂に、溝の口でエル・トポに出会った。ビデオデッキも興奮していた。だが、期待が大きければ大きいほど、失望に変わることは珍しくはない。僕には伝説の前田日明VSアンドレ・ザ・ジャイアントの免疫があったからこそ、心を落ち着け、冷静を装い、エル・トポを体感した。伝説は真実だった。僕は本物の映画を知ってしまった。

須田剛一（ゲームデザイナー）

初めてのホドロフスキー映画は『エル・トポ』だった。大学に入ったばかりだったので80年代後半のこと。哲学科のクラスメイトがエルトポエルトポ言っていて、「ふーん」という感じでのこのこ一緒に観に行ったら、得体の知れない不安で複雑なものが、喉に刺さった魚の小骨のようにいやな感じで刺さってしまった。この不安で複雑なものをどうしたらいいのかと答を求めるように『ホーリー・マウンテン』を一人で劇場に観に行って、ある種気が済んだので少し遠ざかり、次の出逢いは2002年、ロンドンのICAで、上映後監督のトーク付きだった『サンタ・サングレ』になる。『サンタ・サングレ』には救いがあるので小骨はない。**神聖なものと禍々しいものは紙一重だ。美しいものと醜悪なものは表裏一体だ。**その時、監督が「（血が）ピューっピューっと飛んで」と少年のように目を輝かせながらニコニコととても楽しそうに語っている様子に、それからは安心してファンになりました。

楠本まき（漫画家）

新作**『オンリー・ゴッド』が彼へのオマージュであることは間違いありません。**ホドロフスキーは長年の友人ですが、彼の発想には昔から魅了されてきました。まだDVDがなかった80年代後半から90年代初頭にかけて、入手困難だったホドロフスキーの映画について、いろんな都市伝説がありました。アメリカに行けば買えるけど、コピーのコピーのそのまたコピーだとか。僕自身、彼の復帰作だった『サンタ・サングレ/聖なる血』はイギリスで出たVHSを買って1990年頃に観ていましたが、『エル・トポ』と『ホーリー・マウンテン』はずっと観ることができずにいました。日本から発売されたレーザーディスクを買って、ようやく初めてその2作を観ました。その時に、**自分もいつかこんな映画を作りたいと思いました。**そして、「オンリー・ゴッド」は彼から非常に影響を受けていると感じたのと、彼との友情に対して感謝を伝えたかったので、映画の最後に「アレハンドロ・ホドロフスキーに捧ぐ」とクレジットを入れました。ですからこの映画は、私から彼へのギフトです。

※webDICEインタビューより抜粋

ニコラス・ウィンディング・レフン（映画監督）

初めて観たのはいつかちょっと覚えてないですが、『ホーリー・マウンテン』を観ました。

何故か家の棚にビデオが。。。**観てると脳味噌ドロドロです。病みつきです。**もっと犯されたくなりました。おかげで中毒です。期待すら失礼なので、自由なホドロスキーを感じさせてください。

京（DIR EN GREY/sukekiyo）

ホドロフスキーには二度驚かされた。フリーク総出演の哲学映画!そんな触れ込みで登場した**『エル・トポ』は、思いがけず血みどろのかっこいいマカロニ・ウェスタンだった。だがそれはたしかにフリーク総出演のカラフルで血まみれの哲学映画でもあった。**ホドロフスキーには二度驚かされた。一度目は思いがけないわかりやすさに。二度目は哲学的な難解さに。

柳下毅一郎（映画評論家・特殊翻訳家）

ホドロフスキー宅を訪問して　浅井隆（アップリンク社長）

2013年暮れにパリ12区のホドロフスキー監督宅を訪れた。日本公開のためプロモーションでの来日をお願いしにいったのだ。マンションの3階、リビングと書斎が連なり50人以上の宴会が開けるほどの大きなワンルームとなっている部屋に招かれた。リビングの壁一面には、世界中で出版されたホドロフスキーの書籍やDVDそしてBD（バンド・デシネ）があり、映画で使われた小道具、ポスター、絵画、原作BDのフィギュアなどが所狭しと飾られている。書斎には窓以外の壁3面の本棚に蔵書が納められている。僕が最初にホドロフスキー作品と出会ったのは1974年アムステルダム、天井桟敷の『疫病流行記』という公演で数週間滞在していたときに観た『ホーリー・マウンテン』だ。ホドロフスキーには「ホドロフスキーのDUNE」の中での彼の言葉を引用し「僕は、あなたの作品にあのときレイプされました」と言ったら喜んでくれた。当時のカルト映画の中のホドロフスキーの印象しかないので、会うまではどんな怪物かと思っていたらDUNEのドキュメンタリーに出てくる通りの気さくでチャーミングで仕事に対してアグレシップなおじさんだった。現在もBDの原作を平行して3本進めており、23年振りの『リアリティのダンス』の次の新作の準備もしているという。ちなみに次回作は既にBDとして出版されている『ファン・ソロ』、予算が集まればメキシコで撮り、集まりきらなければチリで撮るという。そして見せてくれたのは最近出版したという『ホドロフスキーの365日ツイッター：知恵編』という小さな書籍。ツイッターは21世紀の芸術伝達装置だということで毎日12時から1時間15のツイートを考え1時から30分でツイートするというのを日課にしているという。ちなみにツイッター本は次に「愛」、その次に「政治」とテーマ別に出版されるそうだ。彼の映画のファンからすると空白の23年間であるが、ホドロフスキーは止まることなく映画とは別な形で活動を続けていた。タロットの占い師であり、BDの原作者でもあり、書籍の著者であり、舞台の演出家であり、サイコ・マジシャンでもあり、そして映画監督でもあるホドロフスキーに「あなたの活動を何と説明すればいいのですか?」と聞くと「私はポリバラン（polyvalent）・アーティスト（多様な活動をする芸術家）だ」と答えた。そして、「私は2月に85歳になる。宮崎駿（73歳）はもう映画を作らないそうだが、私はまだこれから3本は映画を撮りたい」という。来日を快諾してくれたビデオメッセージはYoutubeにアップしたので公式サイトから見てください。

FILMOGRAPHY

TEXT:柳下毅一郎（映画評論家・特殊翻訳家）

映画は完璧なメディアであり、すべてを包含する豊かさを持っている、とホドロフスキーは主張する。詩人の閃き、マイムの驚き、演出家の企み、作家の語り……ホドロフスキーの芸術のすべてが映画に結実する。流麗な語り口、鮮やかな映像美、普通の映画で美点とされるようなものはホドロフスキーの映画には存在しない。ホドロフスキーの映画はときに起伏豊かなストーリーというよりエピソードの積み重ねのようにも見える。華やかではあるが散漫だと感じる人もいるだろう。だが、ホドロフスキーの映画がほかの誰とも似ていないことは批判者さえもが認める。ホドロフスキーは映画の学校に行っていたわけでもないし、助監督の経験もない。見よう見まねで、ゼロから映画を作りあげたのである。ときにひどく稚拙で、だが思いがけないところで衝撃を与え、深い思索へと観客を誘いこむ。あるいはそれを魔術と呼ぶのかも知れない。

『ファンド・アンド・リス』 Fando y Lis

1968年/メキシコ/96分/モノクロ/16:9
『アレハンドロ・ホドロフスキー DVD-BOX』発売中発・販：ハピネット
(C)2007 ABKCO FILMS　※『ファンド・アンド・リス』収録

「映画作りのことは何も知らないまま作りはじめた」とホドロフスキーが語る長編第一作。フェルナンド・アラバールの同名戯曲を原作に、下半身麻痺した恋人リスを連れ、すべての望みがかなうタールの街をめざして荒野をゆくファンドはさまざまな怪異に遭遇する。初上映時には暴動を引き起こし、メキシコでは上映禁止となった。

『エル・トポ』 El Topo

1970年/アメリカ、メキシコ/124分/カラー/スタンダード
『エル・トポ HDリマスター版』BluRay&DVD発売中
発・販：ハピネット(C)2007 ABKCO films

1970年に公開されるやミッドナイト・ムービーでのロングラン・ヒットとなり、ホドロフスキーの名を高めたアシッド・ウェスタン。黒づくめのガンマン、エル・トポは砂漠にいる四人の名手を卑劣な手段で殺し、砂漠で最強のガンマンとなるが……セルジオ・レオーネの色濃い前半から打って変わって後半は宗教的救済に向かう。

『ホーリー・マウンテン』 The Holy Mountain

1973年/アメリカ、メキシコ/113分/カラー/16:9　1973年、監督・脚本・音楽・出演　『ホーリー・マウンテン HDリマスター版』
Blu-ray&DVD発売中　発・販：ハピネット　(C)2007 ABKCO films

『エル・トポ』以上に寓話的な物語であり、ホドロフスキー映画中ではもっとも魔術的思考に忠実な一本。“泥棒”と呼ばれる男が“錬金術師”の導きにより七人の成功者と出会う。彼らは不死を得るための修行をし、「聖山=ホーリー・マウンテン」に登ろうとする。ここで描かれるのは錬金術的な「魂の錬成」なのである。

『DUNE』（1975年、未完）

フランク・ハーバートの「デューン／砂の惑星」を原作に、サルバトール・ダリからオーソン・ウェルズまで、ありとあらゆる爆発物を混ぜこんで「見る人の精神を変容させる映画」を作ろうとした。「映画史上もっとも有名な作られなかった映画」となった顛末は『ホドロフスキーのDUNE』（フランク・パヴィッチ監督）で語られる。

『Tusk』

日本未公開/1978年/フランス/119分/カラー/16:9

インドを舞台に、象と少女の交流を描く動物映画。見事な牙をもち、Tusk（牙）と名づけられた象とともに成長した英国人の娘エリスは、やがて象と不思議な絆を感じるようになる。だが貪欲な人間は次々に巨大象の見事な象牙を狙い……何十頭もの象が大暴走する象狩り場面は壮大なスペクタクルになっている。

『サンタ・サングレ/聖なる血』 Santa Sangre

1989年/イギリス/113分/カラー/16:9　『サンタ・サングレ/聖なる血 <HDニューマスター・デラックスエディション>』BluRay&DVD発売中　発：是空　販：ハピネット　(c)INTERSOUND PRODUCTIONS S.r.l. 1989, ALL RIGHTS RESERVED.

サーカスを舞台にした血まみれのメロドラマ。サーカスで育った少年フェニックスは父の浮気と、それにはじまる父母の喧嘩で母が傷つけられるのを目撃し、深いトラウマを抱く。フリークや身体損傷、カーニバルといったホドロフスキーお得意のテーマが明快な復讐物語の枠にきれいにおさまっている。

『The Rainbow Thief』

日本未公開/1990年/イタリア、メキシコ/87分/カラー/16:9

ピーター・オトゥールとオマー・シャリフという『アラビアのロレンス』の共演コンビを揃えたホドロフスキーにとってははじめてのスター大作。だがプロデューサーに首をちらつかされ、満足な映画作りはできなかったという。エキセントリックな大富豪（クリストファー・リー）の遺産をめぐるその甥と友人である泥棒のドタバタ劇。

『リアリティのダンス』 La danza de la realidad

2013年／チリ・フランス／130分／カラー／1:1.85　7月公開予定

ホドロフスキー自身の自伝を脚色した自伝的映画。チリの炭鉱町で元オペラ歌手の母と暴君のような父親の元で育った天使のような少年ホドロフスキーはさまざまな驚異を目撃する。マジック・リアリズムによって語られるホドロフスキーの少年時代は、人生と世界と芸術は不可分であることを今一度力強く宣言する。

COMICS

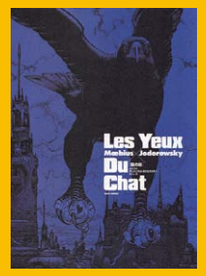
TEXT:原正人（翻訳家）

ホドロフスキー・ファンなら、彼が映画監督であるだけでなく、マルチに活躍するアーティストであることは既にご存じだろう。劇作家、俳優、小説家、詩人、タロットカード研究者、サイコマジシャン…、マルチにもほどがあるというか、最近ではツイッター本まで出す始末である。日本では広く知られていない彼の重要な活動の1つにバンド・デシネ（フランス語圏のマンガ。略してBDとも）の原作がある。映画『デューン』の企画が頓挫したあと（その経緯については『ホドロフスキーのDUNE』を見るべし!）、彼はバンド・デシネ原作者として精力的に作品を発表してきた。「私は金を稼ぐためにBDを書き、金を失うために映画を撮る」（『天使の爪』インタビューより）などと言っていたりもするのだが、これはホドロフスキー流の韜晦と言うべきで、フランスでは彼の原作になる作品が長短合わせて30シリーズ以上も出版されているのである。しかも、驚くべきことに、彼は85歳を迎える今年なお、複数のタイトルを並行して書き続けている現役バリバリの原作者なのだ!

『ホドロフスキーのDUNE』に続き、新作『リアリティのダンス』が上映されるこのホドロフスキー・イヤーに、ぜひ彼のバンド・デシネも読んで、さらに彼を知っていただきたい。幸い今年はホドロフスキーがバンド・デシネ作家のキャリアをスタートしたユマノイドが日本に上陸し、彼の作品を次々と刊行していく予定である。

『猫の目』 Les Yeux du chat

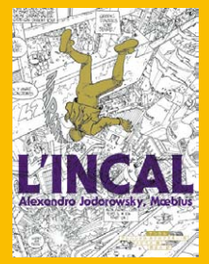
アレハンドロ・ホドロフスキー作、メビウス画、竹書房



ホドロフスキーの記念すべきバンド・デシネ第1作。作画はもちろんメビウス。基本1枚絵の連続で構成されており、永遠に古びないメビウスの作画をじっくり堪能できる。日本のマンガが散文だとすれば、これは詩である。幻の映画『デューン』から『猫の目』まで、2人の間に働いた「魔法の力」についてはぜひホドロフスキー自身による序文を読んでいただきたい。時代の熱が伝わる、実にすばらしい文章である。

『アンカル』 L' Incal

アレハンドロ・ホドロフスキー作、メビウス画、小学館集英社プロダクション



ホドロフスキーとメビウスの名をバンド・デシネ界で不動のものにしたSFの古典的作品。謎の物体アンカルと出会ったダメ探偵の主人公は、知らず知らずのうちに世界を救う冒険に巻き込まれることになる。作者は『デューン』の準備段階で得た富を惜しげもなくこの作品に注ぎ込んでいる。今の時代から見ると、多少古臭く思われる箇所もないではないが、第5章、第6章などは、ホドロフスキー好きにはたまらない展開だろう。

Mœbius & Jodorowsky, LIncal, version classique © Les Humanoïdes Associés, SAS - Paris, 2010

『メタ・バロンの一族』 La Caste des Méta-barons

アレハンドロ・ホドロフスキー作、フアン・ヒメネス画、上・下、小学館集英社プロダクション

宇宙一の殺し屋メタ・バロンを主役に据えた『アンカル』のスピンオフ的位置づけの作品。必ずしも『アンカル』を読んでおく必要はない。歴代メタ・バロンとその伴侶たちの過酷な運命がまさにバロック的筆致で綴られる。おそらくホドロフスキー原作作品の最高傑作の1つだろう。フアン・ヒメネスによる驚異の作画も必見。歴代メタ・バロンのすさまじい親子関係にはホドロフスキーの父ハイメとの関係性が投影されているに違いない。

Gimenez & Jodorowsky, La Caste des Métabarons, © Les Humanoïdes Associés, SAS - Paris, 2012

『天使の爪』 Griffes d' ange

アレハンドロ・ホドロフスキー作、メビウス画、飛鳥新社

サディスティックな性的衝動に悩むメビウスを癒すために一種の治療として作られたという作品。メビウスが描いたさまざまなエロティックな絵をもとにホドロフスキーが1つの物語を紡ぎ出す。その結果できあがったものは、父の亡霊に呪縛されるある少女の変容を語った、猥雑で、衒学的で、時に聖的ですらある実に不思議な作品であった。マックス・エルンストなどの超現実主義をも彷彿とさせる形而上学的ポルノグラフィー。

『アラン・マンジェル氏のスキゾな冒険(仮)』 La Folle du Sacré-Cœur

アレハンドロ・ホドロフスキー作、メビウス画、
発行：ユマノイド／販売：ビエ・ブックス、2014年6月刊予定

©2014 Humanoïds, Inc. Los Angeles.

アラン・ザカリー・マンジェル氏はソルボンヌ大学の哲学教授。順風満帆だった彼の生活にある日突然破滅が訪れる。妻に三行半を突きつけられ、キリストと聖ヨハネの復活を信じる頭のおかしな女学生に追い回され……。女学生エリザベスに振り回されるまま、思いもよらぬ事態に巻き込まれていくアランは、やがてその一連の狂気が彼を救いへと導くことを知る。聖ホドロフスキーと聖メビウスによるいとも神“性”なる福音書。

『テクノペール(仮)』 Les Technopères

アレハンドロ・ホドロフスキー作、ゾラン・ジャニエトフ画、
発行：ユマノイド／販売：ビエ・ブックス、2014年8月刊予定

©2014 Humanoïds, Inc. Los Angeles.

『アンカル』では、科学技術を操り、宇宙を牛耳ろうとする悪の宗教集団として描かれていたテクノ。その老教皇アルビノの来歴と彼の家族の運命を語る一大叙事詩。両親から愛されない子供、内なる老賢者など、自伝『リアリティのダンス』と共通するモチーフが散見され、ある意味自伝色の強い、ファン注目の作品である。この作品に続き、11月には南米のある街を舞台にしたアクション『フアン・ソロ（仮）』も翻訳される予定。

2014年4月、アレハンドロ・ホドロフスキー来日決定！！！

ドキュメンタリー映画『ホドロフスキーのDUNE』、新作『リアリティのダンス』の2作品連続公開や、ホドロフスキーが原作を担当したバンド・デシネの刊行など、2014年はホドロフスキー・イヤー！！そしてなんと、4月にはホドロフスキー監督の来日が決定致しました!!!
イベント、詳細等は決まり次第作品HPにて発表いたします。

『ホドロフスキーのDUNE』6月14日（土）公開

「失敗してもかまわない、それも一つの選択なのだ」スターウォーズなどのSF作品に多大な影響を与えた未完の大作を巡るドキュメンタリー！！

メビウス、ギーガー、ダン・オバノン、サルバドール・ダリ、ミック・ジャガー、ピンク・フロイド等、驚異的な豪華メンバーを配するも、撮影を前にして頓挫した幻のSF大作『DUNE』。その製作過程を、ホドロフスキー、プロデューサーのミシェル・セドゥー、ギーガー、ニコラス・ウィンディング・レフン監督等のインタビューと、膨大なデザイン画や絵コンテなどの資料で綴る、映画史上最も有名な“実現しなかった映画”ホドロフスキー版『DUNE』についての、驚愕、爆笑、感涙のドキュメンタリー！

監督：フランク・パヴィッチ
出演：アレハンドロ・ホドロフスキー、ミシェル・セドゥー、H.R.ギーガー、
　　クリス・フォス、ニコラス・ウィンディング・レフン
（2013年／アメリカ／90分／英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語／カラー／16:9／DCP）
配給：アップリンク／パルコ
http://www.uplink.co.jp/dune/

『リアリティのダンス』7月12日（土）公開

第66回カンヌ国際映画祭監督週間でプレミア上映された、ホドロフスキー23年ぶりの新作。生まれ故郷であるチリ・トコピージャを舞台に、ウクライナから移民して来た一家の話を、瑞々しくファンタスティックな演出で物語る自伝的作品。

1990 年の『The Rainbow Thief』（日本未公開）以来 23 年ぶりとなる新作で、ホドロフスキー監督による自伝『リアリティのダンス』（文遊社刊）が原作。チリの田舎町を舞台に、権威的な父親との軋轢と和解、ホドロフスキーを自身の父親の生まれ変わりだと信じる、元オペラ歌手の母親との関係、そしてホドロフスキー少年が見た”世界”を、シュールレアリスティックなタッチや残酷さも交えながら描写。鮮やかな色彩と音楽、生命力に満ちた、まさにダンサブルな作品。

監督・脚本：アレハンドロ・ホドロフスキー
出演：ブロンティス・ホドロフスキー（『エル・トポ』）、パメラ・フローレス、
　　クリストバル・ホドロフスキー、アダン・ホドロフスキー
音楽：アダン・ホドロフスキー
原作：アレハンドロ・ホドロフスキー『リアリティのダンス』（文遊社）
原題：La Danza de la Realidad（The Dance Of Reality）
（2013年／チリ・フランス／130分／スペイン語／カラー／1:1.85／DCP）
配給：アップリンク／パルコ
http://www.uplink.co.jp/dance/

<映画『リアリティのダンス』原作本>
『リアリティのダンス』
アレハンドロ・ホドロフスキー著、文遊社

新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンクほか、全国順次公開

THIS IS ALEJANDRO JODOROWSKY VOL.1
ホドロフスキーとは何者か？
発行日：2014年2月3日
表紙デザイン：河村康輔

お問合せ：アップリンク
〒150-0042
東京都渋谷区宇田川町37-18　トツネビル4F
TEL：03-6821-6821/FAX：03-3485-8785
film@uplink.co.jp
http://www.uplink.co.jp/

UPLINK　PARCO